

事例  
6

# 授業中に立ち歩く子

授業中に落ち着きがなくなり、立ち歩いてしまう子がいます。彼らにどのように対応すればいいのでしょうか。

## 場面



G君は、小学校4年生。授業中に突然、立ち上がり、フラフラと教室の中を歩き回ってしまいます。ひどい時には、友だちにちょっかいを出し、けんかになることもあります。席につくよう指示を出しますが、なかなか席につけません。

## 対応を考える

授業中に立ち歩いているG君にどのように対応しますか。下に書きましょう。

例) 立ち歩いたら制止する、座ったらほめる、など

---

---

---

---

---

## ■ 解説

### 【原因】 脳を守るために立ち歩きをしている

平山諭氏は、次のように述べている。

「ドーパミンが足りない子どもが動いているのだから、何とかして動かしてあげたい。

じーっとさせようとするのは間違いだったということです。(中略)

だって動きたいわけですから。脳を守りたいわけです。脳を守る行為なんですね」

TOSS岡山サークルMAK『第5回ADHD授業作りセミナー記録冊子』(NPO法人岡山教師力向上支援サークル)

### 【対応1】 意図的に立ち歩く場面を作る

一定時間で、脳内の神経伝達物質の1つ、ドーパミンが不足してくる。そこで授業の中で、意図的に立ち歩ける場面を作る。例えば以下である。

○ノートを前に持ってくる。

○黒板に意見を書く。

○教室に掲示してある資料を見てくる。

こうした活動で立ち歩いても、何の問題もない。他の子どもにも迷惑がかかることも避けられる。

また、歩かなくても、ドーパミンを出させる方法はある。

「全員起立。1回通り音読できたら座りなさい」などの指示を出していくのである。

### 【対応2】 立ち歩きをいったん認める

立ち歩きが始まった時、次のように声をかける。

「そうか、そうか、歩きたいのか。後ろまで行って帰ってきなさい」

「そうか」の言葉かけで、受け入れられたと子どもも安心する。

この時、早く戻った方が得するような仕掛けをしておくとさらに良い。

「ノートに書けたら先着〇名で黒板に書きに来なさい」、「できた人から休み時間」

など、その子が席に早く帰りたくなるようにし向けるのである。

立ち歩きが終わり、席に着いたら、優しい視線を送る。

### 【対応3】 授業をパーツで組み立てる

授業に変化がなく、単調な場合、立ち歩きが起こるとも考えられる。

例えば、社会科で、教師の説明だけが延々と続き、子ども達は聞くだけしかないような授業ではどうか。決して特別支援を要する子に対応した授業とは言えない。

「復習」「写真の読みとり」「グラフの読みとり」「音読」「ノート整理」など、授業の中で変化が出るように、パーツで組み立てていく。

うまい授業をすれば、ADHDの症状は現れにくい。平山諭氏は、うまい授業とは次の4つを満たすものであると述べている。

①楽しい ②考えさせる ③工夫させる ④運動させる

これらの授業をすれば、ドーパミンが出され、立ち歩きも抑えられる。

大恵信昭『特別支援コーディネーターに必要な基本スキル小事典』(明治図書)

## 事例 9

# 教室を飛び出す子

授業中、問題が解けなかったり、自分のしたいことができなかつたりしたら、パニックになり、教室から飛び出していく子はいませんか。彼らにどのように対応すればいいのでしょうか。

## 場面



J君は、ADHD・LDと診断された2年生。教師につばをはく、殴る、蹴るなど反抗挑戦性障害も引き起こしていました。算数の時間、教師用時計で指導していると、J君がやってきて時計をさわろうとしました。手をふりはらうと、興奮し、目つきが変化していきました。今度は鉛筆で、時計に何か書こうとしました。私は、力づくで何度も右手を振り払いましたが、やめません。最後にJ君の手をもち、放り投げました。そして「みんなが頑張ってるんだ。じゃまをするな。」と厳しい口調で言いました。J君は興奮し、机を頭の上に持ち上げながら廊下に出て行きました。

## 原因と対応を考える

J君が教室を飛び出した原因は何でしょうか。また、どのような対応をすればよかったですでしょうか。下に書きましょう。

原因

対応

## ■ 解説

### 【原因1】 J君が時計をさわろうとした時の対応の誤り

ADHDの児童は、注意がいろいろなところに集中する。

そのため、注意が集中したほうへ、動いたり、立ち歩いたりすることが多い。

J君が立ち歩いたのは、時計に興味が集まり、さわろうとしたからであり、ADHDの特性から起きている行動である。

むしろ、授業の内容に興味をもっているからこそその行動と言える。

その行動に対し、ふりはらうという対応をしたため、J君は興奮してしまった。

### 【原因2】 反発するJ君にさらに追い打ちをかけた

このような誤った対応を重ねることで、子どもの自己肯定感はどんどん下がる。

すると、自分の思いが少しでも通らないと、何に対しても反抗するようになる。

これが、「反抗挑戦性障害」である。

鉛筆で時計に何か書こうとしたり、興奮して机を頭の上に持ち上げたりしている状態は、すでに自分自身を制御できていない状態になっている。

このような状態になってしまったA君に対し、力づくでやめさせようとしても、行動はエスカレートするばかりである。

### 【対応】 「制御する」「満たす」

まず、立ち歩いたその瞬間に、

制御する

ようにする。

J君を見つめ、「座ります」と指示を出す。まだ興奮していない状態であれば、これだけで席に戻ることがある。立ち歩くという行動は、脳がさせている行動であり、「今は立ち歩く時ではない」ということを、気付かせてやる必要がある。

間違っても、「何を立っているの！」「今は授業中でしょ！」などと叱責してはいけない。どんどん興奮して、逆効果になってしまう。

それでも、立ち歩いて近づいてくる場合がある。

時計に対する興味を制御できない場合である。

そのような場合は、彼の欲求を

満たす

ことも必要となる。

近づいてきたJ君に「さわりたいの？」と尋ねる。「さわりたい」と答えると、「それじゃあ、J君に問題を出してもらおう」と言って、何時何分を答える問題を出させる。この際、「○問出したら、席に戻るよ。いいね」といって、約束をさせておくことも大切である。時計がさわりたいという欲求が満たされることで、席にもどることが多い。

このような対応の繰り返しで、反抗挑戦性障害の症状を軽減させていくことが大切である。

(TOSS岡山サークルMAK 津下哲也)

# 教室を出ていく子に効果があった対応 ～ほめる、さわる、スモールステップの指導～

## 1 ADHDと診断されたJ君

自分の席に座って話を聞くことができない。

授業中、立ち歩く。床に転がったり、急に教室から出て行ったりと落ち着かない。

気を惹くためか暴言を吐く。

気に入らないことがあれば噛みつく。暴力をふるう。そして、大声で叫びながら暴れる。

叱るとすねて動かなくなる。

給食時間は食べることも遊ぶことに夢中。ミカンにストローをさして汁を吸ったり、  
麺を手で食べたり…とやりたい放題。

新学期、最初の1週間でJ君に関する苦情・相談が5件寄せられた。

## 2 教室から出て行った時

J君の状態は日によって、時間によっていろいろだった。今、笑っていたかと思えば、もう泣き喚いていることもある。

教室から出て行った際の対応については校内でマニュアルを作って対応してもらった。

しかし、放っておいてもしばらくすると戻って来ることの方が多かった。

そこで、「J君のことを気かけながら放っておく」ことにした。

ドーパミンが足りないJ君は動くのが当たり前である。「授業中、きちんと座る」ことを強制するのが必ずしもよいとは言えない。判断基準は「J君が嫌がり出す程度」とした。嫌がるのを無理強いしてまで「座らせておく」必要はないのである。

## 3 効果のあった指導

- 嫌なことは言わない。
- プライドを傷つけることも言わない。
- (教師が)切れずに我慢する。
- 叱りたい時でもぐっと我慢して何も言わない。
- 何でもやらせることが必ずしもよいとは思わないようにする。
- 無理やり引っ張って中に入れない。いずれは入れるようになってくるという視点を持つ。
- 気かけながら、繋がりを持ちながら放っておく。

## 4 ほめる授業で、J君がずい分落ち着いてきた

大切なのは「厳しく叱れば治る」という考え方を捨てることだ。「ほめる授業」は、「ほめない授業」の3～4倍ものドーパミンが出るので学習効果も上がる。**実際にJ君は「ほめる授業」を心がけるだけでもずい分落ち着いてきた。**「合わせろ」ではなく「あなたに合わせてあげる」という視点を教師の側が、まず持つことが大切である。

## 5 漢字の勉強を上機嫌で進めていった

2学期、授業にもなかなか集中できないJ君。そんなJ君が珍しく反応した。**漢字スキル**を扱った時だった。

漢字スキルは、1学期にも使用していたので細かなステップは頭に入っている。J君は声に出しながら上機嫌で進めていった。

J君 「次は？できたよ。見てみて！」 「やったあ！！百点！！」

翌日の国語の授業も漢字スキルになったとたん、反応を示した。

「早く終わった子はノートを開いて練習していなさい」という指示にも従っている。

**漢字スキルは「どのような手順でどれだけやればよいか」がはっきりしている。このスモールステップがJ君には大変効果があった。**

文字は決してきれいとは言えない。

「すごい。一番！」 「早いなあ。賢い」

J君の意欲を褒めて褒めて褒めまくることを心がけた。

同様の効果は計算スキルの時にも見られるようになった。放っておくと「分からない」と発狂する。側について、体のどこかに触ってあげると落ち着いて取り組むことができるようになってきた。

## 6 負けることにも慣れてきた

「教室から出て行く」のは「授業が面白くない」ことが原因の場合もある。知的で飽きない授業を仕組むことも大切だ。

**J君の場合、個別評定や百人一首にはのってきた。**自分の点数が低かったり、負けたりすると大声で泣き喚く。しかし、これはこれでJ君の前頭葉を鍛えるトレーニングとなっているのだ。

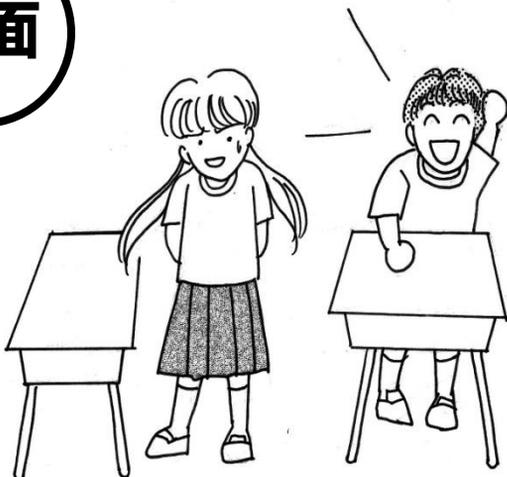
そこで、試合終了後、J君には客観的な勝ち負けをはっきりと伝えるようにした。その場を支配したくてたまらないのがJ君である。そんなJ君の気持ちを心では受け止めつつも、あくまで客観的事実を優先させるのだ。次第に「負ける」ということにも慣れていく。何回も何回も繰り返すうちに慣れていくのだ。

## 事例 11

# 説明の途中で口をはさむ子

説明をしていると、途中で口をはさんだり、思いついたことをすぐに大声で言ってしまう子がいます。

## 場面



算数のわり算の筆算。「まず最初に何をしますか？Sさん」とSさんを指名しました。こういったときにADHD傾向のN君は「(商を)立てます」とすぐに口をはさみます。結局Sさんは答えられなくて困ってしまいます。

## 対応を考える

指名されていないのに口をはさんでしまうN君にどのような対応をすると、よいのでしょうか。下に書きましょう。

## NG対応

### N君と2人でやりとりする

学習にやる気をもって発言しているのですから、「そうだね、N君」とほめるのがよいです。しかし、これだけで、次の問題に行くのは、Sさんを始め、周りの子にとってはよくありません。N君と2人のやりとりだけ授業を進めています。N君を満足させるのは、大切ですが、他の子ともやりとりをし、理解の程度を確認することも大切です。

## ■①の解説

### 【対応1】 他の子にもまた当てて聞く

その子が答えを言っても、他の子に当てる。  
「N君ね。先生が当てるまで黙っててね。あなたが言うことによって、みんなが勉強できなくなっちゃうんだ。待っててね。必ず当てるから、必ず言うところがあるからね」  
「では、次の問題を出すよ。5×3はいくつですか。  
ノートに書きなさい」  
というように作業指示を入れる。

### 【対応2】 待たせておいて「お待ちどうさま」と声をかける

「では、B君」 B「15です」  
「C君」 C「15です」

「お待ちどうさま。N君」

N「15です」「そう」という感じでやる。

甲本卓司『甲本卓司 提言集7 やんちゃに負けない学級づくりの極意』(明治図書)

## 教室での エピソード

### 指名の途中で口をはさむ子への対応

授業中、指名して答えを発表させることがある。算数の時間などは、多い。  
その時にやさしい問題から簡単に出していく。わり算の筆算などがわかりやすいだろう。  
「26÷5の筆算の仕方を考えます。まず、最初に何をしますか。Sさん」  
とSさんを指名したとする。  
ADHDのN君が、すかさず、「立てます」と答える。Sさんは、答えられなくて困ってしまう。  
こういった時にどう指導するかだ。  
「当てられたときにだけ言います」という指導もある。しかし、これだと次も同じように言いそうである。  
私は、次のようにした。

「N君、今日からSさんになったのか」と切り返す。  
すると、「違います」とあわてて取り消す。

この方法は、その時間程度は、持つ。他の子も大爆笑で指導を聞いている。誰一人いやな感じがしないのだ。

甲本卓司「特別支援教育教え方教室」第13号（明治図書）

## 教師の話最後まで聞かずにすぐ口をはさむ子への対応 ～国語の授業で発言のルールを身につけていった～

2年生でADHDの太郎君の担任になった。

出会いの日の太郎君は、常に体を動かしていた。そして、**教師の話最後まで聞かずに、すぐに口をはさんできた。**

そんな太郎君との黄金の3日間に意識したことは、横山浩之医師の次の言葉だ。

子どもからの信頼と尊敬を取り戻し、社会のルールを教え込む。

横山浩之氏に、「ADHDの心理療法」として、教えていただいたことである。  
上の言葉を意識して実践した太郎君との黄金の3日間の国語授業を紹介する。

### 1 国語で一問一答(一字読解)の授業をする

(中略)

一字読解の授業も太郎君を集中させるのに効果的だった。

「先生が問題を出していきます。ノートに①②③④⑤と番号を書いていきなさい」  
「第1問。このお話の題は何ですか。**黙ってノートに書きなさい**」

「まどー」太郎君は、思わず声を出す。

「先生は何と言いましたか。『黙って』と言いました」

太郎君は、**バツの悪そうな顔をする。**

ちゃんと分かっているのだ。

「もう一度言います。第1問。このお話の題は何ですか。黙ってノートに書きなさい」

今度は、**太郎君は黙ってノートに書く。**

すかさずほめる。

「そうです。黙って書きましたね」

10秒くらい待った後、指名する。

「夏美さん」「『まど』です」

「その通り。……できた人。赤鉛筆で○をつけなさい」。

「第2問。このお話を書いた人は誰ですか。書いた人のことを作者と言います。

このお話を書いた作者は誰ですか」

教師は、太郎君を見る。**黙って書いている。**

太郎君に対して、頷きながら、にこっと笑顔を送る。アイコンタクトで、太郎君はほめられ

ていることに気がつく。

言葉がけがなくとも、アイコンタクトでほめることも効果的である。

「第3問。登場人物は誰ですか。一番はじめに出てくるのは誰か書きなさい」

今度は、太郎君の近くに行く。黙って書いている太郎君の肩に軽く手を置く。肩に手を置くことで、太郎君をほめるのである。

「はい。太郎君」「うさぎの子です」「その通り」

こうしたテンポのよい一字読解の授業で、太郎君に発言するときのルールを教えていく。

もちろん、たまにはすぐに答えを言ってしまうこともあったが、「あっ、ごめんなさい」「言っちゃった」と反省する姿が見られるようになった。

## 2 討論の授業をする

2年生の4月でも、討論の授業ができる。

太郎君は、討論の授業が大好きであった。

討論の授業で発言のルールを教えていくことができる。

「ノートの新しいページを開きなさい」

「きつねさんのおうちに春は来ましたか。ノートに問題を書いて、赤鉛筆で囲みなさい」

ノートに書かせ、書いた子は持ってくる。持ってきた子から○をつけてあげる。

「○をもらった人は、理由を書いておきなさい。3つ理由を書けたら、3年生レベルです」

太郎君は、すぐに書いてもってくる。

こう言うと、太郎君は俄然張り切る。

「先生、3つ書いた！」「すごい！太郎君は3年生レベルです」

太郎君は、万歳をして喜ぶ。

一通りノートに○をつけた後、発表させる。

4月の段階なので、まだ挙手指名の発表である。「はい」と言って手を挙げる。

太郎君は、「はい、はい、はい、はい」と何度も言う。

「やり直しをします。『はい』は1回だけ言います」

太郎君も、「はい」と言って手を挙げる。

教師は、ニコッとほほえみかける。

太郎君は、真剣なまなざしでこっちを見ている。

「ぼくは、春が来ていると考えます。『春が来てるよ』と書いてあるからです」

「とてもいい発表の仕方です」

こうして、太郎君は少しずつ授業のルールを身につけていった。

太郎君は、2年生の3学期には、指名なし討論で、友だちの考えをよく聞きながら、付け足しをしたり、質問したり、反論したりできるようになった。

## 事例 27

# ADHD児の席を決めるとき

ADHD児が席替えを要求してきます。教師が決めても、くじ引きをしても、自分が嫌な席になると反抗してきます。どのように席を決めたらいいでしょうか。

## 場面



ADHD傾向のA君が、席替えのとき「何で、いつも先生が決めるの？たまには、俺らの自由にしてや」と言ってきました。他の子も賛同し、勢いに押され、くじ引きで決めました。結果、A君の席は後ろになりました。教師の目がなくなると、近くの子と喋ったり、ノートにらくがきをしたり、手悪さをしたりして授業に集中しない状況が続いています。

## 配慮を考える

席替えの時、A君のように特別支援を要する子には、どのような配慮が必要でしょうか。下に書きましょう。

---

---

---

## ■ 解説

### 【配慮1】 ADHDの子の席は、前の方にする

近眼の子は黒板の字が見えにくい。後ろの方になれば、学習で大きなハンディを負う。当然、教室の前の方に配慮するだろう。

ADHDの子も、注意が続かなかったり、教師の話を聞き逃したりすることが多い。もし、後ろの方に配置すれば、指示を出すごとにその子の席の近くに行き、支援をする必要が生じる。後ろの席では自分よりも前の席の人がすべて見える。余計な刺激とも言える。

ADHDの子は、前の方に配置する。

ただし、最前列になると、前は黒板だけになる。

「全員起立」などの指示が出た時、2列目の方が他の子の真似をして動きやすいという報告もある。

この辺りは、子どものタイプにあわせて決めていく。

前の方に配置しておくことで、ADHDの子も集中しやすくなり、また教師の支援もしやすくなる。

絶対にはずしてはいけないポイントである。

### 【配慮2】 支援を要する子の隣は、真面目で優しい異性にする

たとえば、ADHDで不注意型の男の子がいたとする。

教科書を開いたり、読む位置を教えたり、様々な支援が必要になってくる。

このような子には、真面目で優しい女の子を隣にする。

「教科書、〇ページだよ」と、そっと教えてくれるような子なら大変良い。教師の支援の代わりを務めてくれる。

同性であると、プライドが邪魔し素直に聞けない場合がある。異性の方が、反発することも少なく、うまくいくことが多い。

大恵信昭『特別支援を要する子の担任に必要なトラブル解決スキル事典』(明治図書)

## コラム

### 方法を知り、座席の配置を自由自在にする

高学年は、くじ引きで座席を決めていた経験がある子も多い。教師が一方向的に決めた座席は、素直に受け入れないことも考えられる。そのような時には、一見、くじ引きをしたように見せかけ、実は教師が意図していた席に決めてしまう方法もある。

トランプの一番下に支援の必要な子の席のカードを入れておく。

何度もシャッフルするが、一番下のカードは動かさない。

そのまま一番下に、できるよう上手にくる。

座席を周り、上から順番にカードを出す。

支援の必要な子のときは、さっと下から意図していたカードを出す。

少しテクニックがいるが、習熟すると、座席の配置が自由自在になる。

参考文献：大恵信昭『特別支援を要する子の担任に必要なトラブル解決スキル事典』(明治図書)

## 事例 28

# ADHDの子の担任になったとき

新年度、ADHDの子の担任になりました。  
春休みに何をしておけばいいのでしょうか。

## 場面



ADHDのY君を担当することになりました。Y君は、毎週の生徒指導会で「気になる子」として毎回のように話題になる子です。昨年からは薬の服用を始めています。しかし、授業中は長時間の集中はできず、担任だった教師とやりあっている声も教室の近くでよく聞きました。春休みの間に何をすればいいのかわからないので、不安がっぱいです。

## 準備を考える

上のようなADHDの子を担当することになったとき、春休みに何をしておくといいのでしょうか。下に書きましょう。

## ■ 解説

### 【準備1】 情報を集め、大まかな方針を立てる

特別支援を要する子を担任することになる。初めての経験なら、不安に思うことも多いだろう。

まずは情報を集めていく。集める情報は多ければ多いほど良い。

後で、取捨選択すれば良いからである。

**指導要録、個別の指導計画**など書類から多くのことがわかる。

前年度、担任していたり、かかわっていた教師がいれば、そこからも有益な情報を引き出すことができるだろう。書類には書けなかったような情報をしばしば伝えられることが多い。

同時に、特別支援に関する書籍にも目を通していく。

平山諭氏、杉山登志郎氏の著作は特におすすめである。大まかな方針を立てていく。

### 【準備2】 本人や保護者に会う

大まかな方針が立たなかった場合も考えられる。思い切って、本人、保護者と会うことも検討する。

しかし、まだ担任は発表されていない。**独断で行わず、必ず管理職からの許可を得ておくことが大切である。**

家庭を訪問する。保護者の方は、特別支援を要する子への養育で、今までつらい経験をしていることも多いだろう。

学校に不信感をもっているケースもある。お話しされることを真剣に聞きながら、肯定的に受け入れる。

明るい未来があることを示していけると良い。情報を集め、より明確な方針を立てていく。

### 【準備3】 主治医に相談してみる

特別支援を要する子には、すでに医療的なケアを受けている場合も多い。

主治医との面談ができる心強い。

前任校は病弱養護学校であり、学校の隣に病院が併設されていた。しばしば治療方針や、服用している薬についても詳しく教えていただくことができた。

地域の学校でも、今後、医療との連携は不可欠となる。

早い時期から主治医と顔合わせしておくことで、困難が起こった時にも、スムーズに対応できることが多い。

大恵信昭『特別支援を要する子の担任に必要なトラブル解決スキル事典』(明治図書)

# 情報を収集し、方針を出す

## 1 ADHDのY君

Y君は、私が担任する予定だった子である。

前の年の10月、病院の検査でADHDと診断され、薬の服用を始めていた。

毎週金曜日に行う生活指導朝会で「気になる子」として、毎回のように話題になる子であった。

私がTTをしていた授業では、積極的に手をあげ、よく理解していた。

しかし、身の回りはいつも片付かず、ほとんど何かにさわっていて、長時間の集中はできない子であった。

近くの教室にいと、Y君が担任の女教師とやりあっている声もよく聞こえた。

学校に来る途中、さまざまなモノを拾ってきたり、ゴキブリをわざわざ教室内に持ちこんだり、絵の具をトイレに流したりという話題にこと欠かない子であった。

TTから担任にもどる時、校長から「Y君を担任してほしい」と言われていたので、**3学期末に情報収集を始める**ことにした。

## 2 要録を見る

驚いた。誰が見ても、かなり問題のある子である。生活指導朝会でも話題となる。

ところが、要録の「行動の記録」には、そのようなことは全く書かれていないのだ。

情報開示制の進んだ現在、悪いことは書けないのである。

ア 自然や身の回りの事物に興味関心があり、時間を忘れて見入っていることがよくあった。

イ 思ったことをすぐ口に出し、友だちを傷つけた時、素直にあやまることができた。

ウ 話し好きで、自分の興味を持っていることを長時間話していることが多い。

この3つのことが、参考になった。

## 3 母親と面談をする

担任と決定したわけではないので面談はできない。

**時々、学校に呼ばれてくる母親と立ち話をする。**

「何か持っていないと落ち着かないんです」

「乳離れは早かったのですか」

「そう言えば、早かったですね。アトピーがすごいので落ち着かないのです」

**校長からも、母親と面談した時の様子を聞く。**

「不思議なくらい、ベツリなんだ。お母さんが話をして涙を流すと、Y君がハンカチで涙をふいてあげてるんだ」

家族関係について、よく話を聞く必要がありそうだった。

## 4 児童調査票・保健調査票を見る

4月当初、学校は家庭との連携をはかるためにさまざまな書類を配る。

その中で最も大切なものが「児童調査票」と「保健調査票」である。

「児童調査票」には、「担任に知らせておきたいこと(身体面、生活面など)」という項目があり、ここには保護者の心配なこと、健康面で配慮すべきことを書くようになっている。

「保健調査票」は、養護教諭が管理する。かかりつけの医師、病歴、緊急の際の処置などについても書けるようになっている。

ところが、Y君の「保健調査票」には全く何も書かれていない。

「児童調査票」には、アトピー性皮膚炎のことが第一に書かれ、ADHDについては、ふれられていない。

ア ○と○のアレルギーですが、医師からは食事制限の必要性はないと言われています。食物より、生活のストレスが出ているようだとのお話です。

イ 生活面では、学校の基本的なことが身についておらず、いろいろとご迷惑をおかけすると思いますが、例えば「身の回りの整理整頓」「連絡帳を書く」などと、具体的なことを声をかけていただければと思います。

ウ 後先のことを考えず行動してしまうことがあります。危険な時には、本人が納得いくようにご注意下さい。

ていねいな言葉使いではあるが、担任に対しての要求がかなり出されているようである。

Y君の場合、すでにADHDと診断されている。

何らかの形で学校への連絡が来ているはずだ。

校長に聞いたところ、WISC-Ⅲ報告書が提出されていた。

「言語理解力、教科学習力も身につけている。書くことは他の作業と比べ苦手のようなが学力、常識とも年齢相応に獲得されている」とある。

これなら十分やっつけていける。保護者との連絡を密にし、魅力ある授業を行えば、決して学習についてこれないわけではない。

身の回りの整理整頓も、一時に一事を心がければよい。

田中修「教室の障害児」創刊号（明治図書）

### コラム

## ADHD児への対応の原則～黄金の3日間～

ADHDの子の多くが、学校生活での成功体験が少ない。

そして、高学年であれば、今までに多くの叱責を経験してきているはずである。中には、「頑張ってもどうせできない」と思っている子もいるだろう。そのような状態で最も大切なことは、次のことである。「**成功体験をさせる。**」

どんな子でも、最初の3日間は、今年は頑張ろうというやる気を持っている。ADHDの子だって同じである。

この時期に成功体験を積みせ、そして褒めることが大切である。そのためには、**待つだけでなく、意図的に褒める場面を教師が作り出すことが必要である。**

例えば、教科書を運ぶお手伝いをお願いして褒める。

また、「教科書をさっと出した」「一番に手を挙げた」「姿勢がよい」など、いくらでも褒める材料はある。最初に褒めることで、今年は頑張ろうという意欲が増していく。これは、黄金の3日間だからできることである。

小野隆行『黄金の3日間 誰でもできる楽しく知的な学級づくり 高学年』(明治図書)

## 事例 29

# 保護者に医療機関を勧めるとき

診断はおいていないのですが、ADHDだと思い当たるふしがたくさんある子、いませんか。授業中の多動、不注意、友だちとのトラブルが頻発する子です。保護者に医療機関への受診を勧めたい場合、どうすればよいのでしょうか。

## 場面



3年生のADHDの疑いのある子です。集中できない。絶えず何かを口に入れていないと落ち着かない。周囲とのトラブルが絶えない。集団行動ができない。記憶が必要なこと（並び方、隊形など）がほとんどできない。注意されたことが理解できていない。そこで、保護者に、医療機関に診ていただくよう話したいと考えています。

## 対応を考える

上記の子を医療機関につなげたいです。保護者と面談をもつ際、最初の一言をどのように始めますか。下に書きましょう。

## NG対応

### 「お宅のお子さんは障害を持っています」

最初から「お宅のお子さんは障害を持っています」なんて言ったら親はショックでまず拒否反応が先にたつでしょうから、教師の言い方もいろいろでしょう。順序とか、納得させ方が必要だと思えますね。

向山洋一「教室の障害児」創刊号（明治図書）

## ■ 解説

### 【対応】「変だと思ったことはありませんか？」 「気になることはありませんか？」

最初の言い方もいろいろで、

「お母さんも変だと思ったことはありませんか」  
「気になることはありませんか」と聞いてみる。

すると親は必ずあるはずなんです、障害を持った子なら。

「そういうことがあるならば、どうしたらいいか、どういう所に注意をしたらいいのか、一度専門家に聞いていただけませんか。聞いてみましようか」

とこういう言い方だったらいいと思います。向山の体験で言いますとね、保護者にお話してすぐに「そうか」なんてならないんですよ。大雑把にいて1年間ばかりかかると思った方がいい。3カ月ぐらいで「行ってきます」なんて言ったら御の字ですよ。それぐらいのつもりで。

向山洋一「教室の障害児」創刊号（明治図書）

## コラム

### 医者に相談に行く時の準備

（前略）相談を私（向山）が先生方から受ける時に、その子どものことを私が聞くわけですよ。この子は正常分娩だったんですかと。子どもの時に高熱を出したことはありませんかと。でも担任は知らないんですよ。担任がそんなことも知らないで私の所に相談を持ってくるようなことじゃないんですよ。そんなことは当たり前のことで。

正常分娩であったか、小さい頃高熱を出したか、子どもの頃に子どもだけで生活しなければならぬ状況があったか、暴力的なことでショックを受けたことがあるか、小さい頃に気になったこと、友達と遊んでいてこんなことができなかつたとか、友達の中に入れなかつたとか、いつも皆とやっていて泣いて帰って来たんですよとか、そういったことについて聞いておかなければ話にならない。

通常の場合、昔ですと家庭訪問が一番よかつたので、私の場合は家庭訪問の時にアルバムを用意しておいてくれませんか。必ず用意してくださいと言うとまたいろいろな人権問題が生じますから、よろしければ見させていただいてご家族の願いなどを私なりに感じたいと思います。アルバムを見ながらだと自然に聞けるじゃないですか。こんなに皆に期待されて大きくなつたんですねとか、おじいちゃん・おばあちゃんには最初のお孫さんだったんですねとか、あるいはお生まれになった時に大変だったですか。そういう聞き方でいわゆる正常分娩・異常分娩が素直に分かるじゃないですか。そういった形を教師はちゃんと持つべきなんです。家庭訪問の時に、正常分娩、高熱等の病気は子どもの生育歴の大事な点です。それを改めて聞くと大変なことになりますから。

向山洋一「教室の障害児」創刊号（明治図書）

# 事例 30

## 校内研修で話すことになったとき

特別支援教育についての校内研修を受けたことがあると思います。その研修で「クラスの子の事例を基に、実際にお話ししてほしい」といわれました。どのような内容を話せばいいのでしょうか。

### 場面



反抗挑戦性障害の子を担当しています。ある日、担当の先生に「今度の校内研修は、職員の障がい児に対する理解を深めたい。10分間、担任している児童のことを話してください。『ADHD児の一事例』ということでお願いします」といわれました。

### 研修内容を考える

職員の障がい児(ADHD)に対する理解を深めるために、どのような内容で話しますか。

10分間で話す内容を、下に箇条書きしてみましよう。

---

---

---

---

---

## ■ 解説

例えば次のような内容が考えられる。

- ① 反抗挑戦性障害は、教師が作り出す。
- ② 能力がある子を教師がつぶす可能性がある。
- ③ 医学的な知識がないと指導は不可能。

具体的には、以下の通りである。(※明朝体は、研修で実際にしゃべる言葉)

### 【内容1】 誰もが経験したことで、当事者意識をもってもらう

「教科書の28ページを開いて、3番の問題をやりなさい」というと、「え、先生どこ？」と聞き返す子どもがいます。この子は、ADHDの可能性が 있습니다。

このように、誰でも経験したことがある内容から入り、自分のこととしてとらえさせる。

そして、障がいの特徴に入っていく。

### 【内容2】 注意欠陥の意味

ADHDは、注意欠陥／多動性障害と言います。この注意欠陥というのが、最大のポイントです。注意散漫なのではなく、**注意が集中しすぎるという事も意味**します。

後者は、1つのことに集中しすぎることから他のことが入らなくなるということです。

このあたりから、障がいに対する印象が変わってくる。そして、ワーキングメモリの話へと進めていく。

### 【内容3】 作業記憶＝ワーキングメモリ

ADHDの子には、作業記憶（ワーキングメモリ）容量が少ないのです。だから、脳で一度にいくつもの作業ができないのです。つまり、先ほどの「教科書～」の指示は、**分かるわけがない**のです。

このような子が全体の約6%。そして、これに近い傾向を示す子を含めると全体の20%です。

だんだん、今までの価値観が覆されていく。

ここで、さらにたたみかける。

### 【内容4】 そして、反抗挑戦性障害が生まれる

つまり、教師は出来ないことを強要しているのです。しかも、このように続けたことはないですか。

「さっき言ったでしょ。ちゃんと聞きなさい」

このような叱責が重なると、子どもは「俺はどうせダメだ」と思うようになります。

(※次頁へ続く)

## ■ 解説(続き)

そして、このような思いを繰り返すうちに、

二次障害である反抗挑戦性障害が生まれていきます。

教師の無知が、二次障害を引き起こしてしまうこともあるのです。

二次障害を起こす原因の多くは、教師にあるといい。このことを理解させたうえで、次のことを話す。

### 【内容5】 ADHDには「能力のある子が多い」

ADHDには、「能力のある」子が多くいます。エジソンや坂本竜馬、ケネディもそうだとされています。ちゃんとサポートすれば、立派に育っていきます。

しかし、指導法を間違えると、二次障害を引き起こすこともあります。つまり、その子の可能性を奪ってしまうこともあるのです。

ここまでくれば、医学的な知識がないと、指導が不可能だということが分かってくる。だから、聞く耳を持ってもらえるようになるのである。

小野隆行「教室の障害児」第3号（明治図書）

## 学校での エピソード

「よく分かった」「初めて分かった」興奮気味に同僚が話した校内研修  
～話す順序には必然性がある～

ADHD・LDの研修後、同僚の教師は興奮気味にこう話した。

「よく分かった」「初めて分かった」

(中略)

この教師は、研修の前、こう話していた。子ども達、1人ひとりが違う。だから、「こうだ」と言い切るのは危険。ひとくりにしてはいけない。

何もしないでいると、風潮に流されてしまう。「初めて分かった」という言葉がそれを物語っている。(中略)

私に与えられた時間は10分だった。

私は、向山先生のお話、横山ドクターのお話から学んだことを中心に話した。

話し始めたとたんに、みんな身を乗り出して聞き始めた。メモを取り始める同僚もいた。

研修が終わってからも、たくさんの先生から「よく分かった」と言っていただいた。

話す順序にも必然性がある。

(※研修の内容・順番は、前述解説のとおり。)

小野隆行「教室の障害児」第3号（明治図書）

## 校内研修でY君の事例報告

～研修をきっかけに指導法を改め、激変した子ども・保護者の事実～

### 1 指示を聞き返すY君に叱ってばかりいた

3年生でY君の担任になったとき、特に気にかかる引き継ぎ事項はなかったというところが…。

教師 「教科書24ページの1の問題をやりなさい」  
Y君 「先生どこやるんですか？」

Y君はいつも聞き返した。

「Y君、今言ったばかりでしょ」「Y君、ちゃんと聞いていなさい」  
いつも叱っていたように思うとB教諭は当時を振り返る。(中略)

それ以外にも時間割の変更や縦割り班の集合場所、プールの組分けなど全体にむかって話したことは彼にはなかなか伝わらないことが多かったという。

### 2 急成長したY君

そのY君が今は急成長している。意欲的に話を聞くようになり、作業が早くなり、先生にもほめられ、学校が楽しいと言っている。

きっかけはB教諭自身の研修だった。

B教諭は地域で行われた研修会、TOSSの勉強会などを通して研修を重ねた。  
B教諭の報告に印象的な文章がある。

何度も読んだ。

Y君がADHDかどうかはわからない。

でも、もしそうだとしたら私は「できないから叱る」という一番やってはいけないことをやっていたことに気づく。

その後B教諭は指導を変える。

「教科書を出しなさい」

「24ページを開きなさい。開いた人は手を挙げて」

「1番の問題を指差して」

向山先生が言われた通りに1つひとつの指示を心がけてみた。

指示の言葉を変えただけで「先生どこやるんですか」という質問はグンと減ったという。

また、特別教室への移動や時間割の変更の連絡などは朝と直前と2回言うようにした。そして何回聞き返してきても優しく教えてあげるように心がけた。

そして変化が訪れる。Y君は学校であったことをお母さんに報告する。先生は優しいと言う。学校は楽しいと言う。自信が付き、いろんなことに挑戦するようになる。

B教諭はY君のお母さんから感謝と絶大な信頼を寄せられるようになった。

水野正司「教室の障害児」第3号(明治図書)

## 事例 31

# 症状を抑える薬が処方されたとき

ADHDの子の症状を抑えるために、薬(コンサータ)が処方されました。学校で配慮することは何でしょうか。

## 場面



4年生のADHD児。授業中立ち歩き、集中できません。医師から薬(コンサータ)が処方され、飲み始めることになりました。

ですが、私自身コンサータについてあまり知りません。正直、不安です。

## 配慮することを考える

医師からコンサータが処方されたとき、配慮することは何でしょうか。下に書きましょう。

## コラム

### 薬(コンサータ)の効果

コンサータが利用される前、よくリタリン(現在適用不可)が処方されていた。リタリンが効くのは、おおむね**2時間**までであった。朝食後、すぐに飲んでいる場合、給食前には効かなくなっている状態も想定されていた。コンサータは、一般的に**12時間**ほど効果が続く。朝、一度飲んでおけば、夕食後まで効果が保たれる。

服薬によって、**多動や衝動が抑えられたり、注意力が補われたり**といった、良い状態を作ることができる場合もある。

## ■ 解説

### 【配慮1】 朝、登校時に服薬したかどうか確認する

以前、担任したA君もADHDと診断され、朝食後にコンサータを服薬していた。登校後、まず次のように聞く。

「A君、今日は薬、飲んだかい？」

ほとんどの場合、「飲んだよ」と返事が返ってくる。しかし、時々、「忘れてた」という言葉が返ってくることもあった。その場合、保護者と連絡を取り、**その場ですぐに飲ませるようにした(二重服用を避けるためである)**。

ここでのポイントは以下である。

教師が、予備を預かっておく。

薬を子どもに持っておかせると、ついつい忘れてしまうこともある。教師も気づかないままに授業に突入してしまっはいけない。

教師が持っておき、すぐに飲ませる(ただし、医師の了解は取り付けておく)。

そうすることで、服薬状況も把握しやすくなる。学校で服薬した場合は、予備の補充のために必然的に保護者に連絡をいれる。

その際に、子どもの様子なども合わせて話すことができる。

自分の子どもをよく見ていると、保護者からも信頼されるだろう。

### 【配慮2】 子どもの様子を具体的に記録する

服薬時の子どもの様子は、とても重要である。

服薬量の調節をする上で、医師の最も知りたい情報と言える。

具体的に記録する必要がある。この際のポイントを述べる。

教師の主観を入れず、事実のみを記録する。

「今日の1時間目はとても集中して頑張っていました」このような記録では、あまり役に立たない。

頑張っていたというのは、教師の主観的な見方であり、人により判断が異なってくるからである。

「今日の1時間目、最初の15分は一度も席を立ちませんでした。その後、一度席を立て、1番後ろの友だちのところに行きましたが、30秒ほどで戻ってきてまた問題集を解きました」

このような事実が記載された事実を残していく。

大恵昭信『特別支援を要する子の担任に必要なトラブル解決スキル事典』(明治図書)

# ADHDのB君が薬を服用して変わった

## 1 どうすればいいか分からない

「先生、B君が消しゴムとった」

「先生、B君が私の鉛筆を外に投げた」

毎日、私のもとへ報告されるB君と友だちとのトラブルは数え切れないほどであった。

私はいったいどうしたらよいのか分からなかった。

厳しくすれば大人しくなるかもしれない。

そう思ってきつく叱ったこともあった。

しかしB君は変わらなかった。

何もできなかったという無力感を抱いたまま、1学期は終わった。

夏休み、サークルでADHDのことを初めて知った。衝撃だった。

診断基準を何度も見るうちに、B君はADHDではないかを感じるようになった。

## 2 エスカレートするB君の行動

2学期になってもB君の様子は一向に変わらなかった。それどころか、エスカレートした部分さえあった。

「ばばあ！」「うるさい！」

こんな言葉まで浴びせられた。

チャイムが鳴っても教室に戻ってこない。

職員室におられる先生に頼んで捜してもらったことも1度や2度ではなかった。

着替えだってなかなかできない。

ランドセルは床に転がっている。

そんな状況の中でも、私は次の2つのことだけは続けた。

- |                           |
|---------------------------|
| 1 毎日B君の記録をとる。 2 隠さずに相談する。 |
|---------------------------|

毎日積み重ねてきた記録をもとに、思い切って職員会でB君のことを相談してみた。

すぐに反応があった。

「〇〇してみたらどう？」

「病院で相談することも必要かもしれない」

こういったアドバイスばかりでなく、

「今日、B君そうじ頑張ってたよ」

と、私の見えていないところでのB君の頑張りを教えてもらうこともできた。

いろいろな情報が私のところへ集まってくるようになった。

公開するには勇気がいった。

自分の無力さをさらけ出すように感じたからだ。

でも、もしも公開していなかったら、こんなに情報が集まることはなかっただろう。

発信するからこそ情報が集まる。

まさにこのことを実感した。

しかし、それだけでは解決にはつながらなかった。

### 3 保護者との関係

B君のお母さんはたびたび学校に足を運んでくださった。

我が子を心配されるお母さんに、いつでも学級に来てくださいという気持ちを伝えた。

私も何度かお宅へ伺い、その日の出来事をお話ししたりもした。

B君の気になる様子を話すだけではなく、自分から片づけたこと、友だちにあやまれたこと、ささいなことでも、よい点をできるだけ知らせるようにした。

そのことでお母さんとも明るく話ができ、安心されたように思う。

良好なお母さんとの関係の中で、医療機関へも相談されることを勧めた。

お母さんとの信頼関係がなければ、とても病院に行くことなど勧められなかっただろう。

なぜなら、「病院」や「医療機関」という言葉に抵抗感をもっておられる保護者の方が大多数であるからだ。

医療との連携をしていく上で大切なこと、それは、

保護者との信頼関係を築くこと である。

### 4 B君が薬を服用して変わった！

B君が決定的な変化を見せたのは、3学期も終わりのことだった。

B君が病院にかかるようになってからである。

薬を服用するようになったB君はまるで別人のようだった。

そのときの記録がある。

○月△日

・薬を飲んで登校

・朝の着がえ早い。

よーい、ドンであっというまにおわらせる。

・「算数やりたい。なんか(プリント)ない？」と言う。テストの余りをやるが途中でやめる。

朝からおちついており、席についている。

・書く作業もやろうとする。赤で薄く書いたところまではなぞる。(前は破ってやらないことが多かった)

・卒業式の練習で、ちゃんとやっていない人を注意する。

○月□日

・お別れ会

・なんでもバスケットを仲良くできた。

・笑顔でトラブル全くなし。

・まわりの子は「おもしろB君」と言ってB君を肯定的に受け止める。

こうなるまでには、B君のお母さんの協力が不可欠だった。

数年経った現在もB君は、薬を服用している。

担任はTOSSの仲間である。

友だちとのトラブルは全くと言っていいほど聞かない。

授業中も席に着き、静かに話を聞くことができているそうである。

もしもあの時、医療との連携ができていなかったら今のB君はなかっただろう。